

福祉の世界に関わっているあなたも！

まだまだ知らない 福祉の世界 第7回 看取りや命の大切さ

【開催概要】

○ねらい：多死社会を迎えようとしている今、暮らしの場での看取りをもっと増やしていこうという動きが始まっています。病院、在宅、施設、一人ひとりの良い場所があるはずです。「豊かな」最期について考えます。

○開催日時：平成30年11月28日（水）13：30～16：30

○会場：特別養護老人ホーム ふくら ○参加者：17名

○内容：①【講演】福祉の思想と実践

講師：口分田 政夫氏（びわこ学園医療福祉センター草津施設長）

②【話題提供】特別養護老人ホームの現状について

講師：山口 美由樹 氏（ふくら所長）／金森 暢子 氏（ふくら看護主任）

【プログラム概要】

<開催挨拶>

開始時刻の13:30となり、主催者を代表して、糸賀一雄記念財団の瀬古事務局長から、開催経緯とともに、本日のプログラムの趣旨説明、講師および関係者の紹介が行われました。



<講演>

口分田政夫先生（社会福祉法人びわこ学園医療福祉センター草津施設長）による「福祉の思想と実践」と題した講演が行われました。



はじめに、口分田先生から、小児科医として、この世界に関わったきっかけとともに、「重症児が生きていることは幸せなのか？」という問いかけが提示されました。この問いかけに対して、「時間と人との関わりによって、祝福が生まれる、祝福される存在にかわっていく」という考えを示されました。ご経験のなかで、はじめは受け入れられない家族の拒絶感や絶望感や苦痛が、施設でのケアやサポートにおける気かけられ、守られ、大切にされてきた経験や、そのままでも人生を楽しめる、かえって深い生き方ができるといった気づきを通して、重症児が生きる存在や家族の中心になるという事例が紹介されました。

次に、「反応がないと言われる重症児に、声かけをしてもわかるのか？」といった職員からの問いかけに対して、心拍変動やスペクトラムの変化といった数値だけではなく、表情や皮膚の感覚などを交えて、感じていることが伝わるとともに、1ヶ月くらいたつと心拍数や発疹などの身体的変化による自然な会話の積み重ねとコミュニケーションが生まれることが紹介されました。また、脳障害が重くても、家族によるスキンシップによってわずかに脳が反応するなどの変化があり、関係がつくれていく体験談をお話いただきました。さらに、日々のケアにおいて、自己実現こそが生産であり、食べる、移動するといった協働作業から楽しみを引き出すケアの重要性とともに、生活の中で最後まで人と人とのあいだで楽しく暮らすことの価値が指摘されました。また、自己と他者の協働や出会いのなかで人格が形成され、支援者に喜びになってかえってくるといった共感の世界が生まれる事例もご紹介いただきました。

最後に、そのままでもよいが、充実感を求めて向上しようとしているところに価値があり、身体的応答から、かけがえのない人格といのちの愛おしさ、かわいそうではなく生きがいを感じることができるとを手掛かりに自己決定論と個人主義を超えた思想を支える言葉として、糸賀一雄先生の言葉がいくつか紹介されました。



<取組紹介>

続いて、特別養護老人ホームふくらの現状について、所長の山口美由樹氏と、看護主任の金森暢子氏から事例報告が行われました。

はじめに、山口さんから、ふくらの沿革と入所者の特徴、看取りケアの方針などの基礎情報について説明がありました。昭和50年から滋賀県社会福祉事業団（平成26年に社会福祉法人グローに改組）によって運営されてきたふくらは、3つのエリアを基本としたグループ（西グループ、東グループ、すこやかグループ）でケアに取り組んでいます。現在、男性17名、女性62名の79人の入居者があり、年齢平均は約85歳。平均介護度は4.23であり、要介護度が4（介護なしに日常生活を送ることが困難）、または5（日常生活のほぼ全てにおいて全介助が必要）の方が81%を占めている。認知障害率は99%であり、認知自立度Ⅲa以上（着替え、食事、排泄が上手にできない、異食、収集、奇声、火の不始末、

不潔行為等)が90%となっている。また、平均入居年数は約3年となっているが、1年未満の方が多く占めており、毎年20～30名の退居者がいるなかで、今年度は23名のうち看取りが22名という報告がされました。

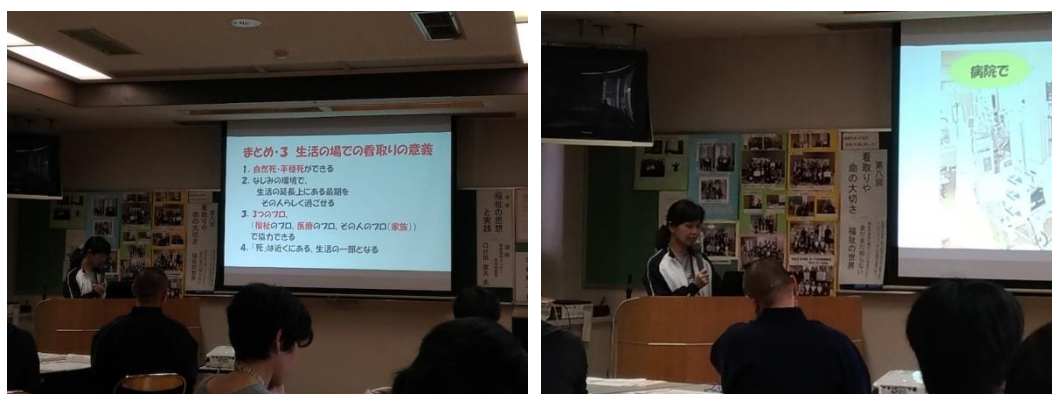


次に、金森さんから具体的な看取りケアについてご自身の体験をふまえた6年間のプロセスと6つの柱が紹介されました。

10年前に「この人に何ができるのだろうか?」ということを考えはじめたが、現場では展開が早く、看取りのあとは、すぐに次の人を迎えないといけないため、死をふりかえる機会がないという課題に直面し、若手がつぶれそうになったと言います。さらに、その人に寄り添うことができない、家族との関係が築けない、看取りの経験や技術が職員間で継承されないといった課題が見られていたそうです。そこで、6年間の試行錯誤を経て、人生のリュックをひもとくことで、その人のキーワードをさがす「看取りカンファレンス」、キーワードをもとに支援員と家族が1つのチームとなってケアに取り組む「チームケア」、看取りのあとに、できたこととできなかったこと、印象に残ったこと、次に活かしたいことを共有する「偲びのカンファレンス」を展開することで、徐々にうまくまわりはじめていることが報告されました。

特に、人生のリュックをひもとくことは、利用者がかつて教育者やレストラン経営者、おしゃれ好きであったというその人のイメージを職員が知るとともに、家族にとっては、現在の弱った父や母ではなく、かつての人柄や役割を思い出し、ケアへの参加とかかわりの方法として機能している。

また、ふくらだけでなく、在宅での看取りにチャレンジすることによって、病気や障害もその人にふくらがよいか、さらには、家族をふくめて満足できるか、途中で看取りの場所を変更することも含めて、あらゆる選択を支えている。このような豊かなケアを通じ「ありがとう、おつかれさま」といった言葉をかけてもらえることが、豊かな気持ちを生む相互作用となり、最終的に専門家としてだけでなく、人としての成長につながっている、との指摘がありました。



最後に、「ホスピタリティ」、「人生のリュックをひもとく」、「キーワードに沿ったケア」、「振り返り」、「気持ちの安全を守る」、「医療は暮らしの道具」、という6つの柱が紹介されました。特に、「気持ちの安全を守る」ことは、看護師時代、病院では死が敗北であり、後ろめたいものであったのに対して、現在は死を自然なこととして受け入れ、肯定することができるようになっていくことが紹介されました。

<グループワーク・意見交換>

10 分間の休憩を挟み、グループワークと意見交換が行われました。

はじめに、各グループで、所属と職種、最後の食事は何を食べたいか？について、1人1分を目安としたグループごとに自己紹介をしていただきました。



まず、口分田先生の講演やふくらの取組紹介をふまえて、印象に残ったことと疑問や質問の2点を中心にワークシート①にまとめる個人作業を行い、グループ内で各自の意見を共有しました。次に、各自の身近な「死」をあげ、それにまつわる悩みや聞いてほしいことについて、ワークシート②にまとめる個人作業をしていただき、再びグループで意見共有しました。

これらの内容をふまえて、ふくらの取組事例などに対して、質問の時間をとりました。「リュックをひもとく中で、情報が少ない場合はどうやって集めているのか?」、「偲びのカンファレンスは具体的にどうやって実施しているのか?」といった質問がありました。これに対して、前者は「地域や知っている人を探すなどどこで情報を得られるかを考えている」、後者は「サービス会議のなかで、支援員、ナース、ケアマネ、歯科衛生士といった関係者が、事前に評価分析シートに記入するなど、工夫しながら実施している」と回答がありました。一方、たくさんの看取りがあると職員の達成感に対する自己評価が下がるといった現場の現状や課題も共有されました。



その後、各グループを代表して1人ずつワークシート②に関連した内容を全体に共有していただきました。「家、施設、病院の対応のなかでどこに行かれたのかわからない方がいる」、「亡くなる前の限られ

た時間の中で、何をどうやって食べてもらうのがよいか?」、「仕事としての看取りと当事者家族としての看取りの違い」といった悩みや「宗教者として手伝いができることがあるかもしれない」といった意見が共有されました。これらの意見に対して、口分田先生から「何を残してくれたのか?ということを見ると、生き様や最後の笑顔といったものを関わった我々の中に残してくれることで、関係を生み出し、命を次につないでいる。人と人とのあいだで看取ることの意味がそこにある」というコメントをいただきました。



<閉会挨拶>

「特別養護老人ホームふくら」の紹介ビデオが背景に流れる中、糸賀一雄記念財団の理事でもあり、本日、ご講演いただいた口分田先生からのご挨拶をもって閉会しました。

